「乳幼児食事相談の主訴別支援策チャート」を用いたチェックシートの使い方

手順① 該当する主訴を選ぶ

こどもの食事中の悩みや不安となっている食の課題と「表１の主訴別分類」の主訴1～６が一致するものを選択する。

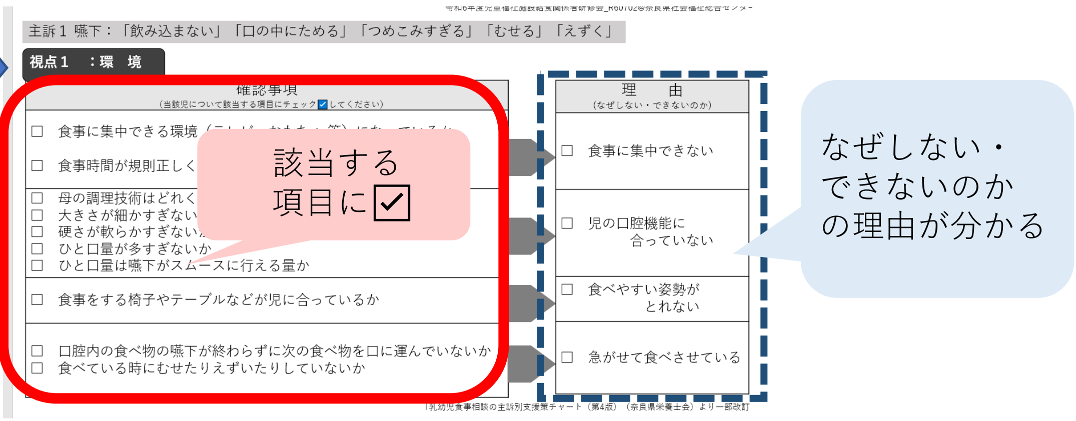
表1. 食事相談内容の主訴別6つの分類項目

	主訴項目
主訴1	嚥下:「飲み込まない」「口の中にためる」「つめこみすぎる」「むせる」「えずく」
主訴2	咀しゃく:「かめない」「かまない」「丸のみ」
主訴3	吸い食べ
主訴4	「手づかみ食べしない」「食器具を使用しない」
主訴5	偏食:「特定のもの(食材、色、味付け)しか食べない」
主訴6	「むら食い」「遊び食べ」「食べる意欲がない」「食に興味がない」「食べ物をうけつけない」

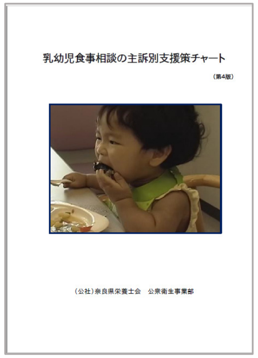
「乳幼児食事相談の主訴別支援策チャート（第4版）（奈良県栄養士会）P３

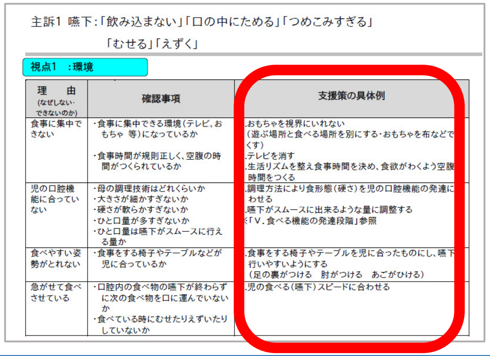
手順② こどもの発達と現状について順に確認

手順①で選択した主訴のチェックシートを用意し、こどもの発達と現状について順に確認する。



手順③ 具体的な支援を考える





手順②でチェックした項目を、
「乳幼児食事相談の支援策チャート」のP17～より索引する。

「支援策の具体例」を参考に、こどもの発達と現状に応じた具体的な支援を考える。

※ 「乳幼児食事相談の支援策チャート」の内容を覚えるのではなく、辞書の様に活用することが望ましい。
※気になるこどもの様子について、保育士、栄養士、調理士、看護師、保健師など保育にかかわる職員にも確認してみるとなおよい。

R6.07 奈良県こども保育課

事例①

＜主訴＞
・現在、生後10か月。
・**手づかみ食べがほとんどできない。**
・おもちゃなども口に入れない。
・赤ちゃんせんべいもなんとか1回は持つが、口にいれたらポイして2回目はない。

＜児の状況＞
●男子・第2子・出生時体重3056g
●授　　乳：混合栄養、生後9か月でミルクのみになった
●離乳状況：生後5か月から開始。生後8か月より2回食/日
●離乳食内容：しっかり炊いた野菜（細かく刻む）、白身魚、ささみはベビーフード

手順①　該当する主訴を選ぶ

表1. 食事相談内容の主訴別6つの分類項目

	主訴項目
主訴1	嚥下：「飲み込まない」「口の中にためる」「つめこみすぎる」「むせる」「えずく」
主訴2	咀しゃく：「かめない」「かまない」「丸のみ」
主訴3	吸い食べ
主訴4	「手づかみ食べしない」「食器具を使用しない」
主訴5	偏食：「特定のもの（食材、色、味付け）しか…い」
主訴6	「むら食い」「遊び食べ」「食べる意欲がな…に興味がない」「食べ物をうけつけない」

主訴４に該当

手順②　こどもの発達と現状について順に確認

主訴４　「手づかみ食べしない」「食器具を使用しない」

視点１　：環　境

確認事項 (当該児について該当する項目にチェック☑してください)	理　由 (なぜしない・できないのか)
☐　保護者が汚れることを嫌がり、させていないのか	☐　経験不足（保護者がさせない）

保育中のこどもの状況や家庭での状況を確認し、該当する項目に☑する

視点２　：運動機能

確認事項 (当該児について該当する項目にチェック☑してください)	理　由 (なぜしない・できないのか)
☐　手やおもちゃを口にもっていけるか ☐　積木などの握り方はどうか	☐　協調運動ができていない

視点１～視点４まで同様に行います

「乳幼児食事相談の主訴別支援策チャート（第4版）（奈良県栄養士会）より一部改訂

事例①

手順③　具体的な支援を考える

主訴４　「手づかみ食べしない」「食器具を使用しない」

視点１　：環　境

確認事項 （当該児について該当する項目にチェック☑してください）	理　　由 （なぜしない・できないのか）
☑ 保護者が汚れることを嫌がり、させていないのか	☐ 経験不足 （保護者がさせない）

「乳幼児食事相談の支援策チャート」のP17～より索引する。

養育者からの聞き取りから判明したため☑

主訴4　「手づかみ食べしない」「食器具を使用しない」

視点1　:環境

理　由 (なぜしない・できないのか)	確認事項	支援策の具体例
経験不足 （保護者がさせない）	・保護者が汚れることを嫌がり、させていないのか	1.持ちやすいもので練習させる（汚れにくいもの） （トーストしたパン、ロールパン、スティック野菜、ミニおにぎり、ベビーせんべい　等） 2.子どもの自分でやりたい気持ちをそがないよう、子ども用のスプーンを持たせる。食器を手でとりにきたらひかないようにし、さわらせる 3.汚れた後の片づけが親の負担にならないような方法を提案する　（新聞やビニールシートを敷く　等） 4.物をなめたり、咥える経験をさせてあげる 幼児期前半(1～2歳)・幼児期後半(3～5歳) 5.汚れないような食具（スプーンやフォーク）の練習をさ

「支援策の具体例」を参考に、こどもの発達と現状に応じた具体的な支援を考える。

視点２　：運動機能

確認事項 （当該児について該当する項目にチェック☑してください）	理　　由 （なぜしない・できないのか）
☑ 手やおもちゃを口にもっていけるか ☐ 積木などの握り方はどうか	☐ 協調運動ができていない

主訴より「おもちゃなども口に入れない。」ため☑

視点２　：運動機能

協調運動ができていない	・手やおもちゃを口にもっていけるか	6.積木や紙をやぶるなど手指を使う遊び（微細運動）をさせる 幼児期前半(1～2歳)・幼児期後半(3～5歳) 7.体を使った遊び（粗大運動）で、上手に食具が使えるようになるという見通しを伝える 8.硬さのバリエーションを変えて、児が握りやすいかたさ　する （軟らかすぎず、かたすぎず） 9.口から食べ物をむかえにいけるよう、前傾姿勢をとら

保育中に自施設でできることは？

「乳幼児食事相談の主訴別支援策チャート」

事例①

手順③　具体的な支援を考える

視点３　：感　覚（視覚）

確認事項（当該児について該当する項目にチェック☑してください）	理　由（なぜしない・できないのか）
☑ 食器具が顔に近づくと怖がっているか	☐ 食器具が顔に近づくと怖い

食事中に食器具が顔に近づくと、顔を背ける様子があったため☑

視点３　：感　覚（触覚）

確認事項（当該児について該当する項目にチェック☑してください）	理　由（なぜしない・できないのか）
☐ 手に触れることができるのはどんなものか ☐ どんな手触りを好むか ☑ おもちゃ等は口にいれるか	☐ 過敏さがある

主訴より「おもちゃなども口に入れない。」ため☑

視点３　：感　覚（聴覚）

確認事項（当該児について該当する項目にチェック☑してください）	理　由（なぜしない・できないのか）
☐ 嫌がったり、怖がる音があるか（掃除機、花火など）	☐ 食具を噛んだ音を嫌がる

視点４　：認　知

確認事項（当該児について該当する項目にチェック☑してください）	理　由（なぜしない・できないのか）
☐ 目が合うか ☐ イナイイナイバーを喜ぶか ☐ 笑いかけると返してくるか ☐ 名前を呼ぶと反応するか ☐ 指を指した方向を見るか ☐ 指さしは出ているか ☑ 大人のまねが出ているか ☐ 母の注意を自分にひこうとするか ☐ 目新しい物・慣れない人は受け入れにくい	☐ 模倣できない

保育中に大人のまねができないことがあったため☑

視点３　：感覚（視覚）

食器具が顔に近づくと怖い	・食器具が顔に近づくと怖がっているか	10.食器具を顔に近づけすぎない

視点３　：感覚（触覚）

敏さがある	・手に触れることができるのはどんなものか ・どんな手触りを好むか ・おもちゃ等は口にいれるか	11.感覚に慣れてもらう （全身運動（手押し車、ワニ歩き、かえる歩き　等）をさせ、手でいろんな感覚を体験させてみる） 遊びの中で色々な物を触らせる （砂遊び、粘土遊び、石鹸遊び、泡遊び） 12.過度のストレスにならないよう、少しずつ慣れさせる （汚れたらすぐに手をふけるよう、タオルなどを用意しておく。唇や口の周りを少しずつ触る、好きな感覚の食具を使わせる）

視点３　：感覚（聴覚）

食具を噛んだ音を嫌がる	・嫌がったり、怖がる音があるか（掃除機、花火など）	13.食具の素材を変える

保育中に自施設でできることは？

視点４　：認知

模倣できない	・目が合うか ・イナイイナイバーを喜ぶか ・笑いかけると返してくるか ・名前を呼ぶと反応するか ・指を指した方向を見るか ・指さしは出ているか ・大人のまねが出ているか …するか ・目新しい物・慣れない人は受け入れにくい	14.出来たら大げさに何度もほめる （出来たらほめるというルールを理解させる） 15.保護者や周囲の人がやって見せる （大げさ、正面に近いところで） 16.手を添えて口に運べるように支援する 17. 目新しい物に手を出さなくても、児の目にふれる所に置いておく。また、保護者が楽しそうに食べたり、触ったりしている様子を見せる

「乳幼児食事相談の主訴別支援策チャート」

事例①

●「乳幼児食事相談の支援策チャート」を用いたチェックシートより分かったこと

視点１　：環　境

おもちゃなどを口に入れるなどの経験が少ない

視点２　：運動機能

手やおもちゃなどを口に入れる協調運動ができていない

視点３　：感　覚

食器具が顔に近づくと顔を背け、嫌がる
おもちゃなどを口に入れる感覚を嫌がる

視点４　：認　知

大人のまねができない

○「乳幼児食事相談の支援策チャート」の具体的な支援策から、保育中にできること

視点１　：環　境

・物をなめたり、咥える経験を保育中にする

視点２　：運動機能

・積み木や紙やぶるなど手指を使う遊びを取り入れる
・前傾姿勢がとれるよう、座り方を確認する

視点３　：感　覚

・食器具を顔に近づけ過ぎないように、食事介助する
・唇や口の周りを少しずつ触る

視点４　：認　知

・手を添えて口に運べるように、食事介助する
・保育者が食べている動作を大げさにし、正面に近いところで見せる

アプローチ その1

はぐくみのサイクルを回そう！

今ある子どもの姿を見つめることから、保育は始まります。
その姿から子どもの興味・関心・状態をつかみ、そっと後押しし、試行錯誤を見守る。
そしてプロセスや結果を振り返り、新たなアクションにつなげていく「はぐくみのサイクル」を
ぐるぐると回していきましょう。

1 姿を見つめる
子どもの「ありのままの姿」を見つめ、観察しましょう。その表情や言動には、さまざまなメッセージが込められています。「観察する」という意識を持つことで、子どもが発しているサインや変化にも気づけるようになります。

2 興味・関心・状態をつかむ
子どもは日々のなかで、たくさんの刺激を受けて変化・成長しています。今持っている興味や心と体の状態・バイオリズムなどを把握し、プログラムのテーマや内容、時間の使い方を調整していきましょう。

3 そっと後押しする
驚きや感動など、子どもが何かに心を動かされているときは「好奇心のたね」が生まれるチャンスです。子どもが探究の一歩を自分から踏み出せるよう、対話を通してそっと後押しし、きっかけをつくりましょう。

4 試行錯誤を見守る
「完成」や「ゴール」だけでなく、過程にも意識を向けてみましょう。子どもが試行錯誤しているときは、あえて見守るのもひとつの選択。本人が望む結果にならなくても、その価値を伝えることで受け止め方は変わるはずです。

5 振り返りをする
「振り返り（リフレクション）」には、自分自身に対して行うもの、保育者同士で行うもの、子どもたちと行うものなどがあります。アプローチの方法についてもいろいろと試しながら、自分や園に合ったスタイルを見つけていきましょう。

6 次につなげる
「振り返り」で得た気づきや学びを、次の実践につなげましょう。このサイクルを回すことで、子どものはぐくみはもちろん、保育者のスキルアップやチーム形成にもつながり、関係者全員が探究を楽しめる場が生まれていくでしょう。

Point
この世界は常に変化し続けるもの。はぐくみのサイクルも、一周して元に戻るのではなく、変化した子どもや自分の状態を踏まえてサイクルを繰り返すため、螺旋を描きながら進んでいくイメージになります。このサイクルは、一日の活動のなかでも実践できますし、長期的な関わりにも活用できます。

40

チェックシートで確認
支援方法を検討

支援方法を実践

・子どもの変化
　例）興味・関心
　　　体幹　など

チェックシートで
再確認

支援方法をアップデート

奈良っ子はぐくみワークブック「ひとたね」P40